

語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



物陰から飛び出す
シャッコイ一発

少年時代の夏の思い出の一つ、水鉄砲。今では様々なデザインのものがありますが、昭和三十年代から悪童たちが夢中になったのは拳銃を模した水鉄砲でした。テレビで西部劇が見られるようになったことなども人気の原因だったでしょう。

でももう少し当時の状況を思い浮かべてみると、近所の路上でやっていたことが今と異なります。第一、車が少なかったし、身を隠す場所ならどこにでもあったものでした。物陰から物陰へ移動しながらちらちらと相手の様子をうかがったりして、ドラマの登場人物を気取っていたのです。チャンバラにしても戦争ごっこにしても、この物陰に潜むことは共通しています。遊びの原点かもしれません。



- ・時の街角／旧松橋家住宅—— 2
- ・マチの博物館／ミチオTOYS—— 3
- ・あるばむレトロポリス／円山陸上競技場—— 4
- ・川筋を行く／石狩川—— 5
- ・来た道行く道／堤製本所—— 6
- ・道具で道草30年—— 7
- ・時計のある風景—— 8

二〇〇七年 夏(全四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
(株)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

いつもの街角の見慣れた建物が姿を消していく度に寂しい思いのする昨今、ああ、こんな建物もあつたなああと懐かしさがこみ上げてくる場所——北海道開拓の村。その貴重な歴史遺産をピックアップしていきます。

ガラスやトタン、石炭ストーブ

和洋折衷、最先端の民家

旧松橋家住宅

明治三十年（一八九七）ころ建築

サイディング仕上げのがっちりした構えの住宅や、高くそびえるマシオンが目立つ札幌で、もうこんなたまたまの家の見かけすることは

ほとんどなくなりました。第一回は二十年ほど前まで中心部（中央区北一東七）にあった旧松橋家住宅です。街の発展の過程は人口動態を追っていくだけでもわかります。現在百八十五万人の札幌市ですが、明治時代は二十年一万五千人、三十年三万五千人ほどの規模。三十年ころの世帯数は約六千四百戸で、九割が借家住まいでした。明治三十年ころ建てられたという旧松橋家住宅は、その一割しかなかった持ち家世帯のうちでも、生活がかなり上のランクに属していたと思われる広さです。木造一部二階建ての一階にある茶の間、仏間、離れ、座敷、客間、西洋間はそれぞれ十畳から十二畳もあり、このほかに台所

女中部屋、風呂場、納戸まで。四畳半ほどの玄関の取次ぎの間なども、一般住宅ではあまり見られないものでしょう。

それもそのはず、所有者の先代、松橋吉之助という人は、札幌駅助役や岩見沢駅長などを歴任した後、大正十年（一九二二）に松橋台名会社を設立し、農業、貸地、貸家業を経営しています。

お金をかけたと思われるところをもう少し探してみますと、離れ、座敷、客間とかぎ型に続く部屋に回している緑の、ガラス戸が目につきます。板ガラスの国産化は明治四十年ころのことです。おそろしく高価な輸入品。さらに札幌で製造が

張った屋根、洋間の石炭ストーブなども。当時の札幌の、和洋折衷の生活の最先端だったことでしょう。忘れてならないのは、松橋吉之助が苦学の人でもあつたということ。小学

厳しい冬の寒さを考えればこんな長いガラス戸の縁側は不経済だがこれが明治から大正にかけての最先端



生のころは学校の行き帰りに野菜を売って家計を助け、中学中退後も農業に従事しながら独学を続けたそうです。各部屋に残っている三千点の書籍は、後年、研究に専念した宗教や精神療法に関するものです。

広い茶の間や客間があるかと思えば上げ下げ窓の洋間もあっていかにも北海道らしい和洋折衷これが洗練されて現代の住宅に

なつかしいおもちゃ
ミニオトOYS
札幌市東区美園三丁目
電話 〇二八〇一八〇八〇

テレビの骨董品鑑定の番組で、自分の家にもありそうな古いおもちゃに十数万円の値段が付いてビックリ。そんなに高いものはありませんが、やはりマニアの世界のあることがよくわかるお店です。

マニアでなくても

よみがえる
あのころ。

多いそうです。

ケースを見回して見て見つけたのは「たくぎんのたくちゃん」。かつてそのプラスチックのクマの貯金箱は家庭にも職場にもありましたが、経営破たん後はこんなところで再生？ していました。

http://www.13.ocn.ne.jp/~m-toys/tempo.htm

無休。

ナーが人気です。

コレクションに熱中しているのはむしろ大人で、子供たちにはゲームもできる二階のカードコーナーが人気です。

東区北二十六条東七丁目二丁目二丁目店があり、近い将来、佐世保市にミニオト倉庫を出店の予定。午後零時開店、九時まで。

ガオレンジャーだぞうです
何に出してきたの？



国道三六号沿いの商店にまぎれるように建っている「ミニオトOYS」。表の「買います売ります」の大きな文字が目印です。コレクターの間ではよく知られたところですが、そつでない人にもなつかしさと夢が広がることでしょう。
今年で開店十年目。代表の向明戸誠さん(三〇)によりますと、こちらで売っているものは、七〇年代以降の漫画やアニメのキャラクターグッズを中心に、ミニカーやプラモデルなど様々。オールド世代にも分かるのは仮面ライダー、ウルトラマン、ガンダムくらいで、トランスフォーマーや聖闘士星矢なんているのになると聞いたことありません。

すが、持ち込みって？「売りたいというお客さんのものを買って取っています。電話一本で自宅まで伺いますよ」と向明戸代表。家の建て替えの時や、自宅の倉庫を整理した時に呼ばれることも

ゴジラの強敵
オキシジェント・
デストロイヤー



たくぎんのたくちゃんも
今や高価になりました

怪獣シリーズも
たくさんあります

うちにもお宝が眠っていないかな



それぞれの名前
わかる人いますか

マニアには、いつ掘り出し物に出会うかわからないという楽しみか、昼間は小学生、夕方は大人土曜日曜は家族連れやお年寄りで込み合う日も。価格はポトルキャップ類の五円に始まって、キャラクターグッズの高いもので五、六万円。



床はゴザ敷き。おもちゃ保護のためクツを脱いで

さほど広くはないけれど見どころは一杯

いかにも何か夢がありそうな外観



昭和29年(1954)第9回国体開催
開会式でメインスタンド前を行進する
北海道の選手、役員団



あるばお レトロポリス

円山陸上競技場

観る機会は減りましたが、観ればやはり心躍る陸上競技。誰もが走ったことのあるフィールド、足に残る土の感触——最近、陸上競技場に足を運んだことはありませんか。

走った、跳んだ、 応援した。

厚別公園陸上競技場や札幌ドームができて足向けることは少なくなりましたが、円山総合運動場が札幌市のアマチュアスポーツのメッカであることに変わりはありません。陸上競技、野球、軟式テニスの選手たちが大きな競技会に集います。陸上競技場を中心にその変遷をみていきましょう。

円山陸上競技場の完成は昭和九年

(一九三四年)八月のこと。走路幅十メートル、一周四百メートル、観客収容人員三万人という規模で、野球場や庭球場と同時に竣工でした。それまで昭和七年に道内初の公認競技場として開場した北大グラウンドや、同九年に開園した小樽市手宮公園競技場が大会に使われていましたが、以後はここがメイン会場となったのです。

戦時中も、野球場や庭球場が畑になっても、ここだけは戦時競技や体力章検定に使われ手つかず。戦後も米軍接収がありましたが、昭和二十五年に解除となっています。すぐにビッグイベントの再開。日米陸上、北海道・ソ連極東親善大会、太平洋沿岸五カ国陸上などの国際大会、陸上だけでなく男子スビー

ド・スケート世界選手権も開催されて、二十九年、第九回国体でメインスタンド建設へと至ります。この時北海道は天皇杯三位、皇后杯九位という健闘。経済白書が「もはや戦後ではない」と書くのは二年後です。その後、スケート場開設(昭四〇)、全天候型新築(昭五七)などを経て、平成八年の大きな改修工事を経て現在の姿になりました。円山の森に誕生した時、暁の超特急・吉岡隆徳や三段跳びのゴールドメダリスト・南部忠平、棒高の大江秀雄、一万メートルの村社構平らが「これこそ世界的な施設だ」と絶賛した「躍動の杜」札幌市円山総合運動場50年史 フィールドの今です。



現在の円山陸上競技場
立派なスタンドと
全天候型のトラックが
スポーツのメッカを象徴



上/昭和35年(1960)の市民体育祭風景
校庭ではなく競技場を走るのかそう快
下/できたばかりの昭和10年(1935)ころ
まだスタンドはない

石狩川

「俳句のまち」の原点 「石狩尚古社」を守る

悠々の大河もあれば町はずれを流れる名もない川もありますが、どこの川のそばにも人がいる限りは、何らかの物語があるはずと、流域を歩いてみます。初回は石狩川河口に俳句の資料館を訪ねました。

川筋を行く

人と川の
様々な
かわりを
かかわりを
たずねて

という

けれど、よそから来た人が目で確かめられるものは何かあるのだろうか」ということから、父親の勝人さんと二人三脚で平成元年に、現在の資料館の完成に漕ぎ付けました。

整理して改めて驚いたのは、俳句に関するものだけでなく吉田松陰や勝海舟の書、秩父事件の首謀者で死刑判決を受けて逃し、石狩に身を潜めていた井上伝蔵の消息、明治



父子二人三脚で作り上げた資料館
町並みの途切れる四つ辻に佇む

石狩川で遊んだ少年時代の話には顔が輝きます。二番面白かったのは、ニシンを糸にぶら下げて、棧橋の下のカワガニを釣り上げたことかな。小学六年までに川の向こう岸まで泳いで渡ることも、度胸試しの一つだったよ」「渡船場から北洋へ向かう船が出た時代もあったな。その船のマストから川に飛び込んで、渡船を持つてる人をひっくりさせたっけ」

川ばかりでなく海もすぐそば。浜でハマナスの花びらをカマス一杯集めて、香水業者に売って小遣いを稼いだり、海で泳いで川で体の塩を流したものとかな。



短冊、俳画を中心に膨大な歴史資料がある
宮武外骨や井上伝蔵に関するものも

郷土資料や歴史、俳句資料が残ったのです。石狩町役場に勤めていた中島家四代目の勝久さんが、これらの資料を保存・展示しようと思

い立ったのは四十歳のころ。「石狩三百年の歴史時代に宮武外骨が刊行した『滑稽新聞』の付録の風刺絵葉書など資料が多岐に渡っているということ。加えて中島家に伝わる仕置、調度品、新聞のスクラップ、写真に至るまで展示、何とんでも勝久さんが石狩育ちですから、石狩のことなら何でも分かるようになっていきます。訪問者は年間三百人ほど。大変な苦勞をして開設しただけに、説明には熱がこもりますが、

それも今は昔。本町地区の目抜き通りは拡張工事中で、すでにかつての町並みはありません。同じ場所に一世以上住んでいることになりませんが、「変わらないのは海と川だけだな」と勝久さんがぼつり。石狩尚古社がいよいよ光彩を放っています。



石狩の俳句の歴史を伝える中島勝久さん

今回三回目となる石狩市主催の俳句コンテスト。全国各地から応募がありますが、石狩がなぜ俳句のまちなのか。その訳を教えてくださいましたのは私設資料館・石狩尚古社の館主、中島勝久さん（六四）です。

方の中島家は小樽で創業した呉服店でこの河口の町への進出が明治八年（二八七五）。鮭がもたらす遊郭の賑わいが商売を支えました。裕福だっただけに物心両面で尚古社の中心となり、中島家の俳人鎌田池菱が全国各地の高名な俳人たちとの親交を深めていきました。しかし鮭漁の衰退とともに俳句も下火へ。中島家の土蔵には膨大な

「古社」の創設が安政三年（二八五六）ころか。一

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

手にするものの少なくなった厚手の書籍類。そもそもは文字が印刷されたばららの紙が、どんな工程を経て一冊の本に仕上がっていくのか、考えたことはありませんか。多くは印刷会社や製本会社での機械による流れ作業ですが、それを手作業で続けている人がいます。

堤康一さん（七）は昭和四年（一九一九）創業の堤製本所の二代目。創業のころは小樽市内に十四、五軒はあった製本屋さん、二代目を継いだ同三十一年にはもう二、三軒しかなかったという貴重な仕事です。

手作業ですから引き受けるのは当然部数の少ないのですが、たとえ一冊でもきちんと製本したものが必要な職種から

トンボという道具で本を固定して背文字や飾りを入れる



毎年注文があります。堤さんのところでは、それは病院の台帳や自治体、団体の帳簿類。とくに多いのが札幌市内の大きな病院の手術台帳や入院院台帳など。

堤さんの仕事は、印刷会社から項目や罫線が印刷された紙が届いてからです。まず数枚ずつ二つ折りにして重ねていき、鋸で切れ目を入れた箇所を紡績糸でかがり縫い。全体が綴じ上がったたら裁断機で



毎年注文のある
病院の台帳や団体の帳簿類



堤製本所
小樽市花園3丁目21-2
TEL (0134) 23-5964

化粧裁ちし、玄のうを細かく打ち付けて背に丸みを出します。さらに注文があればこの段階で小口と天地に色づけも。

一方、この中身をくるむ表紙は、厚手のボール紙などに紙や布クロスを張ります。それを見返して本体と張り合わせながら、表紙や背の文字入れ。背文字はトンボといわれる万力のようなもので本を固定して活字で。表紙には箔押し機を使います。最後は大型の万力にて板と一緒にはさんで一晩寝かせ、水分を吸わせま

「台帳類の注文中心に 綴じる、裁つ、くるむ 製本工程を一人で」

堤 康一さん——堤製本所（小樽市）



トンボは先代から八十年も使っているもの。大小の大きさが揃っている活字や模様付けする花型も

先代から伝わるものです。これらのすっかり黒ずんだ道具を使いながら「自分のアイデアを出すことよりも、お客さんに気に入ってもらうのが仕事」という堤さん。中には千ページを超える役所の帳簿や、一辺が二、三寸もある地図を綴じるバインダーなどの注文もありましたが、近年は仕事もめっきり減りました。

この日はNPO法人北海道職人義塾大蔵学校による中学生のための体験学習会が



表紙の箔押しも年代ものの機械で

開かれ、堤さんも十人の講師陣の一人として和綴じ本の作り方を教えました。希望者は百五十人のうちの十人足らず。「お菓子作りなんかのほうがやさしく見えるのか、人気があるねえ。本づくりにするのはイメージがわかないのかもしれない」と少し寂しうでした。



手動だった初代裁断機を改良したものの

映画のヒットでラストエンペラーは知っていても
著名な親戚家だった弟のことを知る人は少ないかも
筆者は三十代にその人から書を贈られている

その日、父と母と私の三人で映画を観に街に出かけた。シネコンではなく映画館というものがまだあった頃のこと、そしてそこでは通し上映が当たり前前で、好きな時間に入ることができ、一日中でもいることができた頃のことだ。

我々の観た映画は、母の希望で愛新覚羅溥儀さんの一生を描いた「ラストエンペラー」だ。観終わつた後、食事をしながらしばし語り合った。時代背景。満州。王道楽土といつてもそれは日本人にとつての楽土であり、五族協和も漢滿蒙鮮の上に日本人が君臨するだけのこと。地元農民から安く無理やり土地を買い上げての満蒙開拓——でもこんな話をしては食事の雰囲気も壊れるので、話題は溥儀さんや溥儀さんの弟の溥傑さん、奥さんの浩さん(ひろ)のことに集中していった。父も母も少し遅れてはいても同時代を生き延びたので話はずんだものだ。

ラストエンペラーの弟、溥傑さんの書。

うど仏間の一面が空いてしまい適当なものがなく、ちよつと考えてから「兄ちゃん(父も母も私のことを三人兄妹の長男だからそう呼んでいた)、溥傑さんと知り合ってたよなあ。何かないかい」と聞く。私は「溥傑さんが当時(江青たち四人組が倒された頃)の心境を詩にして送ってくれた色紙があつたと思うけど」と答えた。そして大判のハードカバーの本の間にはさんでおいた色紙を探し出してきて見せると、「これは額に入れれば壁のサイズにピッタリ。飾ってもいいかなあ」と言う。私の同意で父はすぐに取引のある会社に電話した。

しばらくしてやって来た店主さんが「これは、ひよつとしたらラストエンペラーの弟さんの書ですか」。父がうなずくと「やはりそれなりのものに入れないと。今、店に連絡して持つて来させます。電話お借りします(まだ携帯電話はなかった)。二十分程でお店のパンが数点の額を運んで来て、さらに「会長さん、お気に召さなければ特注してください。どんなものでも作りますから」と言う。

父が特注に傾き加減だったので、私は小声で、溥傑さんはそういう人でないんだから、この中から選ばばいい。それに休みの今日中に作業は終えた方がいいと思うよと勧めた。父も、持ち主がそう言うのならそうするか、と一つに決めた。かくして溥傑さんの書は、私が溥傑さんと二人で写った写真とともに家の仏間を飾ることになった。

その後、家を訪れた客でこの額に気付いた人は、「これは愛新覚羅溥傑さん? 実物は初めて。会長さんのところにはさすがにすごいものがありますね」と驚く。それを聞く父の顔はとてもうれしそうであった。自分の息子が溥傑さんのような人と知り合ってたということが自慢だったのだと思う。大正生まれの父にとつて、溥傑さんと公爵家から嫁いだ浩さんは、まさに雲の上の人たちだったのである。

三十五歳のころの筆者(左)と溥傑さん(北京の自宅にて)



坂家の仏間を飾る溥傑さんの流れるような書

あいしんかくらふけつ
●愛新覚羅溥傑 1907-1994

清朝最後の皇帝・溥儀の弟 1929日本の学習院に留学 1937嵯峨家の令嬢で天皇家の親戚に当たる浩と結婚 日本の敗戦により中国に送還 社会復帰後、日中友好の架け橋として活躍 書家としても知られる

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

ここから始まる サケのまち

この時計をデザインした人の頭に兵庫県今津港のシンボル、江戸後期に造られた現役最古の木造灯笼型の灯台があったのでしようか。サケ漁で賑わう石狩川河口に和人の直轄支配が始まるのは江戸後期。ここが石狩市本町というからには、海浜の漁を取り仕切る場所だったでしょう。道路一つ

はさんだ向かいの川淵では、日本で最初の缶詰（サケ）が製造されていますし、長らく町役場もありました。そんな歴史を経て石狩温泉番屋の湯のオープンが平成九年。今もこの時計塔が入湯者を迎えてくれますが、番屋の湯は今年春から「鯱の湯」としてリニューアルしています。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構ですよ。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

質問箱

本づくりの「？」にお答えします。お気軽に質問をお寄せください。

Q 生まれ育った地域の歴史を小冊子にでもまとめたいと思いますが、手元の資料が足りませんし、資料ばかりでは専門的なものになりそうです。なにかよい方法はありますか。

聞き書きという手もある

A 学者や学校の先生が書く歴史は、たくさん資料をベースにして正確さを第一としたもの。それはそれで貴重な仕事です。欠けているものがあるとなれば、歴史の場面に居合わせた人たちの生の声ではないでしょうか。少し専門的になりますが、最近、

オーラルヒストリーという言葉が耳にします。簡単に言えば聞き書きということですが、歴史資料には出てこないこと、文献ではわからないことに、この手法で光を当てていくという作業です。

ここまで難しく考えなくても、地域の歴史を本にするのに応用できそうです。たとえば「聞き書き・〇〇町の昔」とか「お年寄りに聞いた昔話」などというやり方です。地域に古くから住んでいる人をたずねて、お茶でも飲みながら幼い頃の話や戦争中のことを聞いてみるのです。

もちろん多少の前知識、下調べは必要ですし、聞いた話の裏づけも要ります。また焦点の定まらない平板な話にならないように、テーマを絞ってインタビューすることも大事です。一人でなく、何人かのグループでやってみる方法もありますね。

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめおきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています

慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたく願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。